

大阪くらしの今昔館所蔵品を巡る

大坂画壇の絵師たち

4. 文人画(I)

大阪くらしの今昔館には近世の大坂画壇の絵師による作品が所蔵されています。
それらの中から注目すべき作品を紹介していきます。

文人画は中国では士大夫といわれた官僚や地主階級などの知識人が、教養の一つとして描いたのが始まりです。彼らは専門絵師の描く技術の優れた絵よりも、文人が墨のみで描く絵の方が、教養や精神性があり格が高いと考えました。文人画は素人にも描きやすい山水画が多く、墨画または淡彩で簡明に描くという共通した特徴がありました。この作風は江戸後期の日本において新しい画風として広まり、南画ともよばれ流行しました。

日本の文人画を大成したのは京都の池大雅(1726~76)です。大雅のもとには多くの人たちが集まりましたが、中には大坂で文人画を広めた人たちも含まれていました。今回は大雅の流れをひく2人の文人画家を紹介します。

福原五岳「虎溪三笑図」 紙本墨画淡彩 一幅 96.2×38.2cm



虎溪三笑図

福原五岳(1730~99)は備後・尾道の人で名を元素、字は子絢、号は楽聖堂などと称しました。京に上り池大雅に学び、のちに大坂に出て大雅風を広めました。大雅は常識にとらわれぬ振るまいで奇人と称されましたが、五岳も師に劣らぬ人物であったようです。「性酒を嗜み客有れば必留酌して詩を賦す(略)池大雅と相師友し名もまた伯仲の間にあり」(『大日本書画名家大鑑』)とあります。酒が好きで、客があれば引き留めて酒を飲み詩を作った。池大雅とは師でもあり友でもある間柄で、名声も優劣をつけられなかった、というのです。

五岳には面白い逸話があります。ある時、五岳は師の大雅とともに高野山に行く仕度をしていたところ、頼春水(頼山陽の父、儒学者)が訪ねて来ました。3人は酒を飲み始め、結局五岳は行かずじまになってしまいました。この時に大雅の詠んだ漢詩が知られています。

楽聖福先生 倒樽日為度

倒樽又倒樽 倒樽終無度

すなわち福原先生、日に何度も酒樽をあける。飲んで飲んでまた飲んで、何度あけたか分からない。ついに度を過ぎてぐでんぐでん、といったところでしょうか。楽聖堂の号らしく楽しい酒を飲んだのでしょう。

五岳の来坂の時期は不明ですが、安永

元年(1772)の年紀をもつ「洞庭湖図」屏風(大阪市立美術館蔵)には、多くの大坂の文人が画中に詩を書きこんでおり、すでに大坂の名士であったことが窺えます。住まいは初め北渡部町、のちに本町一丁目にありました。

本図に描かれた虎溪は廬山(江西省の山)にある川です。東晋の僧慧遠は廬山に東林精舎を建て、虎溪を俗界との境として、30年間山を出ませんでした。ところが詩人の陶淵明と道士の陸修静が来た時、送りながら話に夢中になり、つい虎溪を越えてしまいました。3人は気がついて大笑いした、という場面を表わしています。もっともこの3人は同時代の人物ではなく、「三教一致」(儒教・仏教・道教の求めるところは同じ)を示すために作られた説話です。

本図では遠景に懸崖、中景に巨大な松樹と川、近景に談笑する3人の人物を描いています。顔の見える右側の人物は陶淵明と思われる。左側でああ、しまった、と岩に肘をつくのが慧遠でしょう。面貌表現には狩野派風が見え、五岳の多様な学習が窺えます。

林閔苑「人物山水花鳥図扇面」 紙本墨画 4面 天地 26.8×差し渡し44.0cm



人物山水花鳥図扇面

林閔苑は名を新、字を日新といい、福原五岳に画を学びました。『画乗要略』は「閔苑は性が慧敏で、明画を慕った。明画を多数所持する堺の某家に通い、ついにその風趣を得た」とする岡本豊彦(1773~1845)の話を紹介しています。さらに「美人画は筆法繊細・賦彩鮮明で仇英の絵に、水墨人物画は剛直で張平山の絵に似ている」(仇英、張平山はともに明代の画家)と評しています。生没年は不明ですが、安永4年(1775)の『浪華郷友録』、同8、9年の『木村兼葭堂日記』にその名が見え、天明7年(1787)刊『新撰和漢書画一覽』には「壯ニ未シテ没ス」とあり、若くしてすでに没していることが分かります。住

まいは幸橋でした。

本図は現在、4面のばらばらのパネルに貼付されていますが、元は違い棚の天袋に貼付されていたと思われます。恐らく右から山水、人物(2面)、花鳥(雪鷺)と並んでいたでしょう。左端が冬景であるのは日本の四季絵の伝統をひくもので、右端の山水図にのみ落款があります。水辺に腰掛けて書物を見る人物は、『仙仏奇踪』(仙人の姿を集めた本、明1602刊)にある鬼谷子(楚の思想家)からとったものでしょう。2人連れは高仙と琴を抱えた童子で、弾琴にふさわしい場所を探しています。人物の面貌や、繊細で鋭い筆致は明画に通じるものがあります。



読書人物図部分

扇面形をうまく活かした構図と、さまざまな画題、画法を含む本図は、閔苑の優れた画技を示すものとして注目されます。

(岩間 香 摂南大学教授)

うら話

見どころ

「町の中の祠」

江戸時代を復元した9階の展示室には、路地を入ると正面に朱塗りの祠があります。路地裏のこうした風景は、大坂の町中では当たり前のように見られた景色でした。船場・島之内は、戦災で焼き尽くされた結果、こうした江戸時代の情緒は消えてしまいましたが、市内でこうした情緒を今に残しているのが、空堀商店街界隈の街並みです。太平洋戦争の戦火を免れた市内では数少ない地域です。通りに面して町家が建ち、あちらこちらに路地の入り口が開いている。誘われるように路地をくぐるとまさに迷路。

この迷路には、必ずといっていいほど祠が祀られています。地元の方に話を聞くと、そのほとんどがお地藏さんだといいます。そして8月下旬には、地藏盆が町内の行事として行われ、地藏盆をハシゴする子どもたちもいて、たいへん賑わったといいます。

大阪くらしの今昔館が設計段階からこだわった展示の中身や、ふだんは気づかない展示の裏側をご紹介します。



大阪くらしの今昔館では、江戸時代の町の姿を求めて空堀界隈の空間調査を実施してきました。その中に、江戸時代まで遡る地蔵の祠を確認しました。文政年間の年号が記された札を祀っているこの地蔵堂は、今となっては粗末な祠となっていますが、当時は人々の信仰を集めたことがうかがえる貴重な祠堂といえます。

さて、当ミュージアムでも、こうした賑わいが欲しいと願って祠を復元しました。ちょっと立派すぎるといって来館者の批評とは別に、密かな人気があります。この神さんを「安住大明神」と名付けました。「あずみ」ではなく「あんじゅ」と読んでいただきたい。「安心して住める町」という意味を込めて命名したのです。祠には、定番の賽銭箱を置いています。小さな箱なので誰も気づかずに見ていただけたらと当初は考えていました。ところが、

開館1年後に事件は突如としてやってきたのです。来館者からのクレームです。「安住大明神に賽銭をあげようとしたら、賽銭箱がいっぱいで入らない。なんとかして!」というのです。慌てて賽銭箱を開けてびっくり。小銭がぎゅうぎゅう詰り。取りだすと3,442円入っているのです。いつの間に…。皆さんは何をお願いしたのでしょうか。こっそりと拝んでいる方を観察してみると、お歳を召された方が多いのです。失礼とは思いつつ聞いてみました。すると「苦しまずに彼岸へ行きたい」というのです。そうか。向こうでも安住したかったんですね。

(学芸員 明珍健二)